

行幸町遺跡 発掘調査中

中央幹線の築造に伴い遺跡の発掘調査を行っています。平成8年に工事に先立つ調査で、はじめて天神町てんじんちょうから行幸町みゆきちょうにかけての一带で遺跡が発見されました。これまでの調査で、最も古いものでは縄文時代早期じょうもん(約1万年前)の石器が見つっています。この遺跡の中心となるのは、飛鳥時代あすかから奈良時代なら(7世紀～8世紀)にかけての大溝かまくらと鎌倉時代むろまちから室町時代あと(13～15世紀)の村の跡です。

離宮道をはさんだ天神町と行幸町にまたがる東西約200mの範囲には、鎌倉・室町時代の中世の村が広がっていたことが分かってきました。

井戸や建物の柱跡などが見つっています。

今年度行ってきた発掘調査では、5基の井戸と多くの柱の跡、溝などがあり、集落のまわりには畑を作っていたことがわかりました。また、当時の人のお墓も見つかりました。

西側の調査地 →



中世の墓 ↑



中世のお墓

お墓はおそらく屋敷の敷地の中に造られていたと考えられ、二人並んで葬られていました。

ひとは、腕と足を折り曲げたかたちで埋葬されていました。また、小さな刀(刀子)と思われるものを一緒に納めていました。

性別や年齢などは、まだ分かっていませんが、この2つのお墓は土ごと切り取って埋蔵文化財センター(西区)に運び、そこで詳しく調査をします。



墓の切り取り作業 →



井戸(時期を違えて5基の井戸が造られている) ↑



木枠の残る井戸 ↑



大溝

行幸町側の調査では、東西150m以上続く大きな溝が見つっています。この溝は、最大幅6mで、深い部分では2mあります。また、この溝から南北に分かれるふたつの溝も見つっています。

この大溝は、飛鳥時代(7世紀後半)に掘られ、奈良時代頃(8世紀)には大部分が埋もれてしまったと考えられます。この溝が掘られた目的ははっきりしませんが、奈良時代には木を組んだしがらみ(柵)を溝の中に作っており、用水としていたのではないかと推測されます。また、溝からは、奈良時代の人が字の練習をした、墨の残った木片などが出ています。

